

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4371500010		
法人名	有限会社 さかがわ		
事業所名	グループホーム遊鳥		
所在地	熊本県天草市栖本町湯船原759番地		
自己評価作成日	平成22年1月5日	評価結果市町村受理日	平成22年2月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市南熊本3-13-12-205
訪問調査日	平成22年1月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設から4年目を迎えようとしているが、開設当初からの利用者が半数以上、利用を継続されてる。それに伴い身体的や認知症が徐々に重度化しているが、その中でも出来ることややりたいことを日頃の言動から見極め、職員全員でミーティングの際に実現に向けて話し合っている。利用者の中にはご主人の入院先に面会に行ったり、自宅や墓の様子が気になる方は様子を見に行けるように支援している。
また、職員は”あまくさ認知症を地域で支える会”に5名、”全国キャラバンメイト連絡協議会”に1名登録しており、地域に向けて認知症の正しい知識を理解していただけるように伝える準備をしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

自然豊かな環境の中に、ホームが目指すゆとりあるゆかいな生活のため“笑顔で ゆっくりと 安全に”の理念の実践に、職員は笑顔を決らすことなく、入居者主体のサービス提供や地域との交流を重視した支援を管理者及び職員が一丸となって取組んでいる。今年度は家族会の会則の変更や夜間帯の運営推進会議開催により多くの家族の出席や委員の提案が活かされ、多くのボランティアの訪問により日常生活にメリハリとなって表れ、地域の中での生活は充実したものとなっている。また、開設時からの入居者も多く、高齢化・重度化は否めないが、“出来ることを出来るペースでゆっくりと”を全職員が共通認識の下、寄添いのケア、傾聴に努め、「協力医療機関へ車椅子を押して受診できることが重度化の入居者を支えることができます。」と言う職員の言葉が、入居者・家族には心強く、家族から絶大な信頼を得ているホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム内の見えるところに理念を掲示したり、毎朝の申し送り時に出席者全員で唱和し共有を図っているが、地域に向けた理念がまだ作れていないので職員全員で考えていきたい。	開設時より、ホームが目指すゆとりある ゆかいな生活のため“笑顔で ゆっくりと 安全に”を理念に、日々の唱和や毎月開催しているミーティングで理念に即したケアであるか話し合い共有化を図り、管理者は日常生活が笑顔で過ごせるよう指導している。今後、地域密着型として展開している姿勢を理念とすべく全員で検討する意向である。	地域生活の拡充、地域との関係強化に取り組んでおり、地域密着型としての姿勢を理念に具現化して示し、啓発の一環とすることが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元中学生から季節毎に花や野菜の苗を頂き、育てるなどして交流を図ったり、ホーム行事に近所の方に声を掛け交流を図っている。また、地元のボランティア団体の訪問を毎週1回定期的に受けている。	散歩時地域住民との歓談やホーム行事への参加、地元中学生との交流は常態化し季節毎に花や野菜の苗を持参し入居者と交流している。町内のボランティアチームの訪問、習字指導ボランティア等もあり、ホームも小学生の職場体験の場として提供している。社協主催の健康ハイキングや郷土の祭り等地域での生活は拡充している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトに登録している職員がいて、これから地域の方に認知症について伝えていく予定である。また、夏休みには小学生の職場体験の受入を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族代表の選任は行わずに天草市在住の家族全てに運営推進会議の出席依頼をして、その会で意見を求め運営に反映させている。	今年度は家族会の会則を変更し家族代表から全員の家族に議題を提示し参加案内を出し、外部評価結果をもとに報告を行い、全家族に議事録や資料を送付している。ボランティア活用についての具体的な提案が、毎月の訪問へつながる等運営推進会議が地域住民との交流促進に一役を担っている。また、お月見会終了後に開催する等創意工夫も見られる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者や他ホームの計画作成担当と一緒に介護計画や記録の様式などについて勉強会をしている。	運営者は日常的に行政に出向き、制度や天草市全体の福祉状況等情報交換を行っている。また、行政側も地域密着型担当者を置き、介護プラン様式や記録方法等の勉強会を開催する等天草市全体の質の向上に積極的であることが窺われる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束について年1回勉強会を開いている。日中は玄関の施錠をせず他者に悪影響を与えるとき以外は自由に行動してもらっている。	“身体拘束ゼロを目指す”とする厚労省の資料をもとにした勉強会の開催により、身体拘束の弊害を全員が正しく認識している。施錠も拘束の一つと捉え、日中は開錠し自由な生活を支援しており、身体拘束の実例は無い。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年1回勉強会を開いており、虐待防止について意識を強めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要性は理解しており今後も外部研修等に参加して理解を深めて活用につなげていく予定である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際、及び改定時には文書と口頭で説明をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族会に天草市在住の家族全てに出席依頼を行い、その会で意見を求め運営に反映させている。また、面会時には近況の報告を行い、意見や要望を受ける機会を作っている。	運営推進会議や家族会を問題提起の場としており、家族会の会則を変更し全家族に運営推進会議への参加を依頼し、家族会での話し合いを事業所へあげる体制を取っている。また、家族の訪問時意見や要望を聞くようにしており、業務日誌に要望等を記載し、訪問歯科の採用や「子どもにも介護を体験させたい」との要望に応える等具体的に反映させている。入居者には日常生活の中からの把握に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月2回のミーティングには極力参加して職員の意見や利用者の状況を把握し反映を心掛けている。	代表者参加の1日・15日の定例会議において、職員の意見や入居者の状況の把握に努めており、食事作りのシフト等の業務改善、職員の希望によりシフト調整等取入れ、管理者も日々職員との対話により方向性の統一を図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	シフト作成はホーム長が作成し勤務状況の把握はできている。給与等に関しては、職員からの疑問や意見がある場合は個別又はミーティングの場で相談に応じている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所外の研修には種類や力量に応じて参加を促したり、自発的に参加している。事業所内の研修は年間計画に沿ってミーティング時に勉強会を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会に加入しており、定期的な研修会や年一回の忘年会に積極的に参加している。また、他事業所との情報交換や訪問を行っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活環境の変化により心身に影響を及ぼすことを理解した上で、利用時には特に1対1で会話できる環境を作ったり、悩みや不安があるときはその都度話を傾聴して安心や信頼の確保に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用開始にあたって不安や要望等を聞くようにしているが、しっかりとした信頼を確保してから得られる情報も多々あるため、面会時等を利用して家族の話を聞き出している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談がある場合は、必ずご本人がその時に生活している場に出向き家族同伴の中で状態を把握してサービスの見極めを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事全般や行事など利用者の意欲を引き出し一緒に行うことで、職員と利用者ともに支え合って生活していると感じている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員だけの支援では限界があり、家族には家族にしかできない支援もあることを伝えており、月最低1回の面会や家族が対応可能であれば外出、外泊をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者と馴染みの関係である家族や知人の面会及び電話での交流を促している。 また、地元の敬老会参加や個別の墓参りなどを支援して馴染みの関係を継続できるように努めている。	郷土の祭りや自宅への帰宅、家族の入院先への見舞いに毎月職員が同行したり、家族との墓参りや家族との食事、入居者の地元の老人会メンバーの訪問や地元の敬老会への出席等これまでの人・場所との関係継続を積極的に取り入れ支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間の相性や正確を把握して席を検討したり、家事をしてもらう時もトラブル無く作業ができるような利用者同士に組んでもらっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了の理由が長期加療によるものがほとんどで入院にあたり情報提供を細かくしたり、しばらくは頻回に面会行き安否の確認や不足の情報を伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	1対1の対話を重要視しておりその中から希望や意向を引き出すようにしている。対話が困難な方は家族や職員で本人は何を望んでいるかを考えている。	職員は入居者一人ひとりの寄添いのケア、傾聴や行動・言動からの把握に努め、家族との相談やケアカンファレンス時に個々の望みや思いを検討し、本人本位の生活を支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族からの情報収集はもちろん、近所の方や友人などからの情報も収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日頃の言動と比較して変化があったり、能力を判断できるような出来事は記録に残して、職員が共通の情報として共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族から日頃の会話などから思いをくみ取りそれをスタッフ間で話し合い、本人の能力でできないことを補う考えでなく、やりたいことの実現、できることの継続に視点を置き作成している。	日々の職員の気づきや家族の意向をもとにしたケアカンファレンスを介護計画に活かしている。長期目標の6ヵ月毎にモニタリング・サービス担当者会議を開催し、入居者のしたいこと、出来ることを優先にした実現可能なプランを作成している。例えば、趣味の継続による生きがい支援等である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の生活状況を個別の記録やチェック表に記入して全職員で情報を共有している。その情報を下に月2回のミーティング時に見直しを検討している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	母体が福祉用具を取り扱っており、必要に応じて消耗品以外は無料で貸し出している。また、他町に同母体のグループホームがあり、人手がいるときは相互に助け合っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元ボランティア団体の方々が週1回2名1組での訪問があったり、日頃の買い物は極力地元の店で購入するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の変更を承諾いただいた利用者は協力医療機関の医師に変更していただいているが、病状によってはかかりつけ医より家族に説明や確認をとって専門医を紹介していただいている。	家族に協力医院の存在を説明し協力医院からの往診、専門受診は家族の同意のもと職員が同行している。受診時には心身の状態及び受診目的と受診内容・医師指示を記載し、家族には電話により状況を報告している。歯の治療も事前検診を家族に報告し、同意書を交わし訪問歯科を取り入れている。看護職員の配置や協力医院の看護師の協力、日々の健康管理により早期発見に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内の看護師や協力医療機関の看護師に緊急時はもちろん定期的に病状を説明して指示を仰いだり助言をもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院がスムーズに行えるように情報提供書を活用している。また、入院の場合は本人の不安や寂しさを極力抑えられるように毎日、休みの職員や勤務の職員が他の入居者と一緒に様子を伺いに面会に行き病状の把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今の段階では終末期になってみないと判断できないと思っている家族が殆どであるため、定期的に家族に確認する必要がある。	“医療についての事前調査書”にて重度化や終末期ケアに向け本人・家族の思いを聞き取っており、自然な看取りを希望される家族や現時点では判断できず、その時の状況で決めたいとする家族等様々である。開所時からの入居者も多く、高齢化が進んでおり、日々のかかわりの中で異変や体調変化を見極め、家族との話し合いを重ねていく意向である。	看護職員の配置や全職員の思いや方針は一致し、重度化の入居者へのケアに職員が一丸となったの取り組みは大いに評価できる。今後も家族との話し合いの場を持ち、思いを確認しながら、ホームで支援が出来ること、出来ない事など明確な提示をする事が望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に消防署員による救急法の講習を受けているが、現時点では、急変時に実際に対応できるか不安な職員もいるため事業所内の救急法の勉強会などを行い、回数を重ね自信をもって対応できるようにしていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に消防署員立ち会いの下、消防訓練を行っており動きは確認できているが、災害時のホーム敷地外への避難などは消防計画書に沿って口頭で説明しただけ実際に訓練までは至っていない。	年2回消防署の協力により蘇生法も含めた総合訓練、今年度は火災通報装置を設置し使用方法の勉強会や半年毎に業者による防災設備点検を行っている。また、災害時の連絡体制やマニュアルも整備している。	2月に計画している総合訓練には地域住民の参加が予定されている。運営推進会議には地元消防団の参加によりホームへの理解は得られており、近隣住民参加の訓練時には避難時間の把握や避難後の見守り等協力体制の確立が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	基本的には名字で呼んでいるが、家族や本人の了解の下、名前で呼んだ方が反応が良い方には名前であったり、職員を家族や知人と思いこんでいる利用者にはその方になりきって演じている。	個人情報保護方針・目的を玄関に掲示し、職員は倫理規定に則り情報管理に努めている。 入居者は職員を家族のように慕い、職員も尊敬の念を持ちながら、その思いに応えている。食後もリビングを離れることなく、昔話や日々のなにげない会話に花が咲き、終日にぎやかな様子を垣間見た。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が選択できるような声掛けを心掛けている。入浴に関しても自己決定を尊重しており、入浴嫌いの方には時間を空け再度声掛けしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床就寝時間や食事時間など本人のペースに合わせて時間をづらしたり柔軟に対応しているが、利用者の重度化により身体介護に追われ、利用者のペースではなく職員のペースになる時がある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	出かけるときや入浴の着替えなどは可能な限り本人に選択してもらっている。 また、地元美容室の利用や、ホーム職員での髪カットなど個人で選んでもらい対応したり、行事によっては化粧をしたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の購入から野菜切りや魚をさばいてもらったり、下膳や皿洗いを自発的にしてもらっている。	担当職員が入居者の好みを聞きながら1週間毎に献立を作成し、食材の買出しから野菜や魚の下ごしらえ等、職員と入居者が楽しみながら取り組んでいる。自分の役目とばかりに食後の皿洗いに向かわれる入居者等自然発生的に取り組み、嚙下状態に応じ1対1でゆっくりと時間をかけた食事介助と一緒に歓談する姿等和やかな食事となっている。菜園には中学生が種から育てた苗が育ち、近隣住民の差し入れ等の協力により食卓を賑わしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事水分量は大まかに把握しており、食事水分が不足していると思われるときは甘味物や好物、果物等を提供して代用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎週1回訪問歯科の往診を受けており、利用者によっては口腔ケアや口腔マッサージをしてもらっている。また、職員は口腔ケアや口腔環境について相談指導を受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の体調や本人の安心のために、リハビリパンツを使用しているが極力定期的な声掛けや誘導で失敗無く排泄できるように促している。	個々の入居者の排泄パターンを熟知した職員が、その日その時の様子を確認しながら、声かけ・誘導によりトイレでの排泄を支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳や果物を提供しているが不定期であり、運動の時間も極力設けているが、季節によって散歩などの運動回数に差がある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には毎日昼から夕食後まで入浴できるようにしており、その時間以外でも希望や汚れたりする事があれば柔軟に応じている。	昼食後からの入浴を毎日支援し、日々の入浴を楽しみとされる入居者もいる。汚染や発汗状態によりシャワー等柔軟に対応し、拒否者にも一番風呂を勧めて見たりと声かけの工夫により間隔が空かないように支援している。ゆず湯やしょうぶ湯等季節感を採り入れたり、地元の温泉等も楽しみとなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	どうしても眠れない方はお茶を提供したり話しをしたり気持ちが落ち着くように配慮する。利用者によっては添い寝をしたり職員が居ることを伝えると安心して眠る方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師や薬剤師の指示を受診記録に記入したり、薬局からもらう薬の情報が書いてある用紙を毎日記入する記録のファイルに綴じていつでも薬の確認ができるようにしている。薬の情報が不足しているときはインターネットなどを利用して把握するように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	習字であったり編み物、読書、家族の入院先への面会など個々に応じた活動を支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出を好まれる方への支援は十分できているが、利用者の中にはあまり外出をしたがらない方がいて、まれに参加される神様や御大師様、恵比寿様の参拝の機会をもう少し設け外出を楽しんでいただけるように工夫していきたい。	散歩や買い物、庭に出て野菜や花の手入れをしたり、ドライブ等頻繁に外出している。中には外出をあまり好まない方もあり、無理強いせず希望を聞きながら神社参拝等に出かける等喜びにつながるよう支援している。地域行事や祭りへの参加も多く、車椅子を押して散歩に出られる家族や地元のいきいきサロンの高齢者と共に花見を開催する等家族・地域の協力支援により多彩な外出が支援されている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者の中でお金の心配をされる方は、家族と相談して少額ずつ手渡し所持してもらっている。私物を購入するときはその中から自分で支払いをしてもらい職員は傍で見守っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族によっては写真を同封した写真を郵送してもらえ、それに対してお礼の手紙を職員と一緒に書いたり、電話で話してもらっている。家族や家のことが気になる利用者には直接家族と電話で話していただき安心してもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じた飾りや花を置くことで季節感を感じていただいている。行事時の写真や習字などを掲示し色々な行事に自分が参加していることを再確認していただいている。	広々としたリビングは数箇所ソファを配置し入居者個々が自分の居場所として寛ぎ、和室には炬燵が置かれ、食事を摂ったり休息されるなど落ち着いた生活空間となっている。入居者自ら玄関周りを掃除される方や食器洗いに精を出す方等入居者のホームを思う方も清潔感や居心地の良さにつながっている。静かな田園の中に有り、騒音や異臭も無く、穏やかな日常であることを確認した。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室やリビング、ホールのソファ、玄関ポーチのベンチなどで気の合う利用者同士、思い思いの時間を過ごしてもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者によってADLの状態や生活習慣を考慮し畳の部屋であったり、フローリングの部屋であったりと生活しやすい環境を提供している。家具なども自宅で使い慣れたものを持参していただけるようお願いしている。	入居者の心身状態に応じ、フローリング・畳の部屋を使い分けしている。自宅での使い慣れた家具やテレビ・ソファ・座椅子等を持ち込まれ、家族写真や入居者の作品(書等)を飾り、家族の協力で思い思いの部屋がやすらぎの場となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下などには不要なものを置かず危険や混乱が軽減できるように配慮している。居室には表札をトイレや浴室には分かるようなのれんを掲げてわかりやすいように気を配っている。		